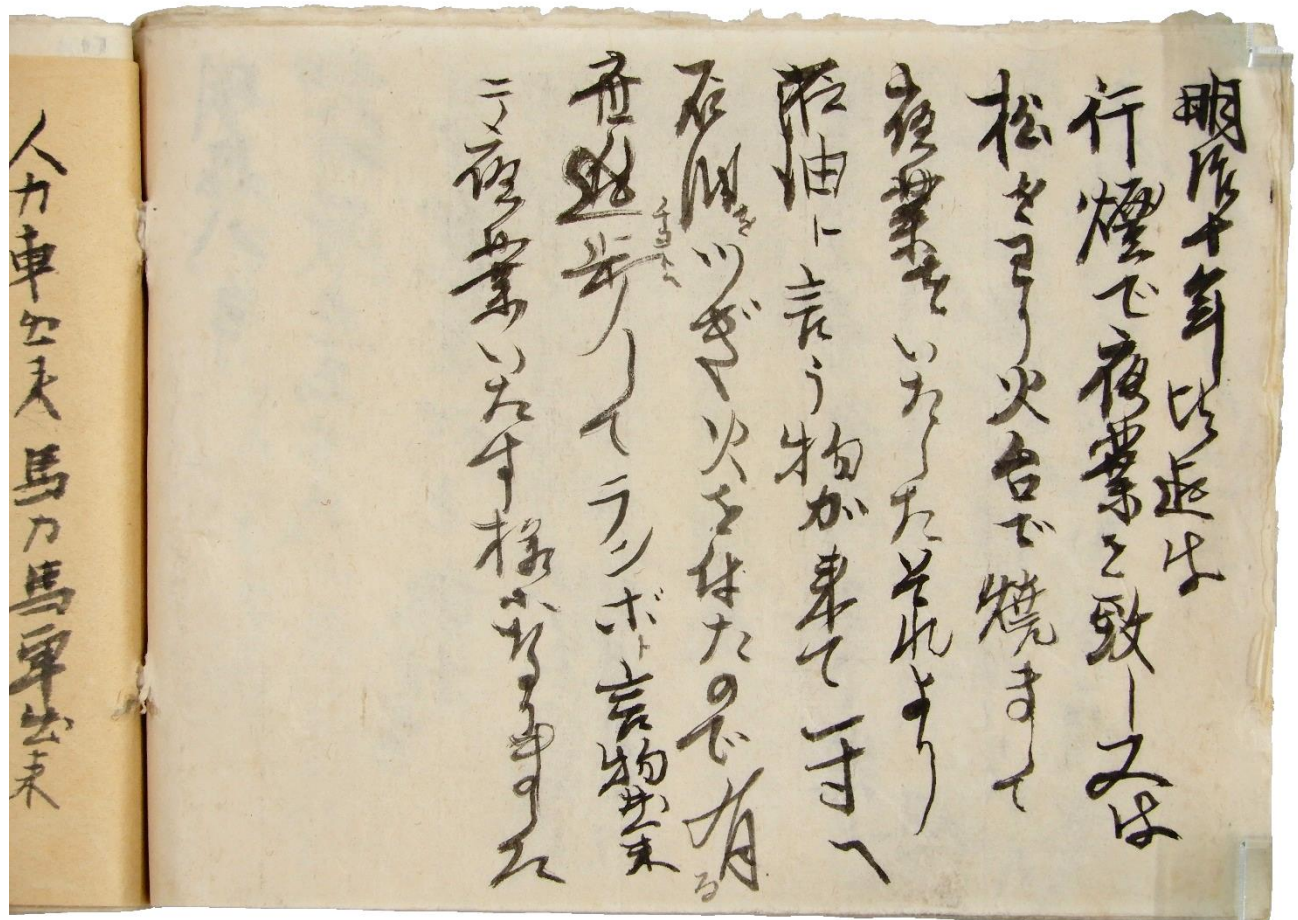


石油

石油に
言う物か
来て
す
石油
ツギ
ツギ
火を
付た
の
で
有
ランボ
と
言
物
サ
マ



日清戦争後〔回想録〕（丸野勝太郎家文書近世 30／芝）

〔回想録〕は明らかに近代文書だが、文書番号を振ったのは杉山ではないので御容赦願いたい。

人々の生活において、燃料は極めて重要な問題です。

近代においては、石油やガスの登場によって大きな衝撃がもたらされました。

燃料としてのガスについては、袋井市域の史料ではまだあまり見つけられていないのですが、石油については、いくらか史料が見つかります。

早い時期のものでは、明治の頃の石油関係の史料があります。

芝（この史料が書かれた頃は浅羽村か上浅羽村かと思われます）の、おそらく丸野竹次郎という人が、日清戦争の頃に記した回想録が残っています。その「回想録」九葉目裏面に、次のような記述があります。

明治^{（一八七七）}十年頃迄は行灯で夜業を致し、又は松をヨリ、火台で焼まして夜業をいたした。それより石油^{（又油）}と言う物が来て一寸へ石油をツギ火を付たので有。世進歩^{（チヨトハ）}してランプ^{（ランプ）}ボ言物出来^{（トカ）}夜業いたす様になりました。^{（エ）}

この史料は面白い話題も多いので、私の講座ではよく紹介しているのですが、回想録（二次史料）であるため、史料の性格や成立に関する説明で随分長くなってしまいます。本書の性格上、明治の史料で一項目使うのは控えた方がいいかと思い、今回は収録しませんでした。

右に引用した内容は、明治十年（一八七七）頃までは行灯、あるいは松の火で夜業をしていたが、明治十年頃からは石油が登場し、また、「ランプ」——ランプのことでしょう——ができたので、それで夜業をするようになった、ということです。

「回想録」の右の記事から推測できるとおり、江戸時代、燃料といえはマツをはじめとした山の木々でした^{（ロ）}。

山の木々や草は燃料のみならず刈敷などの肥料としても最大限利用さ

れてきました^{（ロ）}。つまり、江戸時代までの村の生活は、（山が近くにある地域では）山に左右されるものだったのです。実際に、江戸時代には、入会^{（イリカイ）}の山に関する訴訟文書が、それこそ山のように作成されていました。ちなみに、山がない地域では、堤防に生えた植物など、その地域に合わせた方法で燃料を入手していたようです。

石油など、新たな燃料の登場は、少なくとも、燃料については、村と山（山の草木）との関係を変える、大きな衝撃を与えるものでした。

もともと、燃料として、マツ使用に与えたインパクトとしては、直接的には石油よりもプロパンガスの登場の方が大きかったようです^{（ロ）}。

さて、石油は、北陸などに産し、日本でも早くから知られていました。

「石油」の名は江戸時代に使われ出しますが、主には（明治末くらいまでは）「くそうず」「くさみず」「草水」「臭水」などと呼ばれていました。

江戸時代にも、石油に灯りを灯してみた人はいるのですが、「減るのが早い」「臭い」など評判はあまりよくありませんでした。

日常生活での石油利用は、資料がよく残っておらず不明点も多いのですが、明治のはじめ頃には始まっていたようです。

とはいえ、明治初年の石油（「石炭油」などとも呼ばれていたようです）は、よく引火、爆発し、臭いも強い、という状況だったようです。石油に関する法整備は、明治十年代に始まるようですね^{（ロ）}。

その頃の石油の用途はランプにほぼ限られていました^{（ロ）}。

ランプは幕末に日本に入ってきましたが、明治四〇五年頃に東京で流行し、九州でも同じ頃に使用されだしました。とはいえ、当時の九州では高嶺の花といった扱いだったようです^{（ロ）}。

福岡では、明治十八年（一八八五）頃までにはランプがずいぶん普及したようですが^{（ロ）}、「回想録」によれば、芝では明治十年（一八七七）以降にランプが広まりだしたとの由。ランプ普及の実態には謎が多いものの、福岡の例を考えると、芝でのランプ普及は、決して遅いもので

はなかったのではないだろうか。

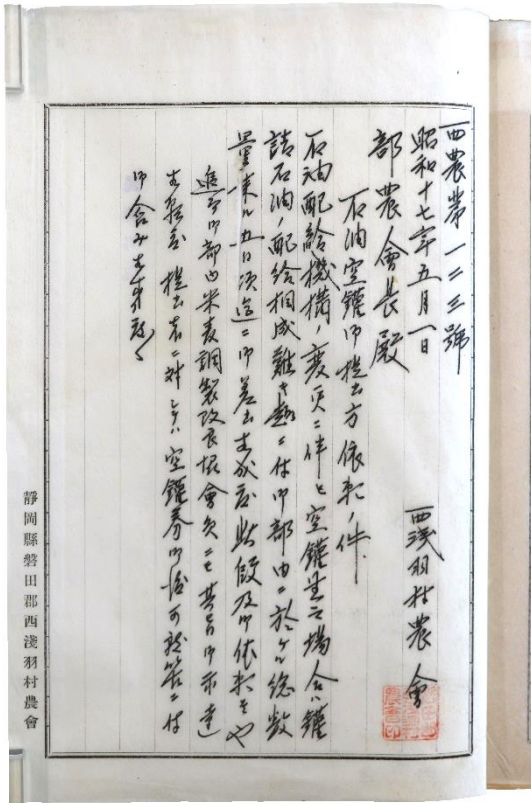
さて、今回の本題である、昭和、特に日中戦争、アジア・太平洋戦争期の日本における石油使用ですが、「大東亜」戦争は石油に始まり石油に終わった、という言葉もあるほどで^⑤、石油は大変重要な燃料と位置づけられるものでした^⑥。

一九三九年七月、日本の侵略的な姿勢に対して、アメリカは、日米通商条約破棄を通告し、石油の供給を制限し始めました^⑦。

一九四〇年九月に日独伊三国同盟が成立すると、アメリカはモラル・エンバージョ（道義的禁輸措置）を発動し、航空機用ハイオクタン・ガソリンの対日輸送を禁止。この頃から日本は南方油田地帯からの石油獲得を考えるようになりました^⑧。

当時、日本は石油の三分の二をアメリカから輸入していた^⑨ので、アメリカの石油輸出禁止は大きなものでした。

日本政府は一九四〇年九月以後蘭領インド政庁と交渉し石油の輸入増加を求めたものの決裂。一九四一年に日本軍が南部仏印に進駐したこと



【写真1】「西農第一二三号 石油空缶御提出方依頼ノ件」（本書 180 号）

を受け、アメリカは八月一日に対日石油輸出禁止令を出し、発動機用燃料。航空機用潤滑油ならびにその原料の輸出が禁止されました^⑩。

日本軍は東南アジアに侵攻し、いくつかの石油施設を手に入れましたが、正確な情報を持っていなかったのか、正気を失っていたのか、石油に関して陸軍が大部分を担当し、海軍が生産量の少ない石油施設を担当したため、船舶を保有している海軍は、石油の生産量不足に悩み、陸軍は、タンカーがないため石油を輸送（当時東南アジアなどから日本に物資を送ることを「還送」と言いました）できず、石油生産量を抑制する、という事態に陥りました^⑪。

結局、日本・日本軍は敗戦まで慢性的な石油不足に陥ります。

アメリカの石油輸出禁止後の、昭和十七年（一九四二）五月一日付け「西農第一二三号 石油空缶御提出方依頼ノ件」は、石油配給に関する内容です【写真1】。

西農第一二三号
（一九四二）
昭和十七年五月一日

西浅羽村農会（印）

部農会長 殿

石油空缶御提出方依頼ノ件

石油配給機構ノ変更ニ伴ヒ、空缶無レ之場合ハ缶詰石油ノ配給相成難キ趣ニ付、御部内ニ於ケル総数量、来ル五日頃迄ニ御差出相成度、此段及ニ御依頼ノ候也。

追而御部内米麦調製改良協会員ニモ其旨御示達相願度、提出者ニ対シテハ空缶御渡可レ致答ニ付、御含み相成候。（同）

石油配給機構が変更になった、ということなので、このあたりから石油不足が本格的に実感されるようになったのでしょうか。昭和十七年（一九四二）五月五日付け「預り証」は、右の史料に対応するものと思われる

す【写真2】。

預り証

一、石油空缶九升

右預り候也。

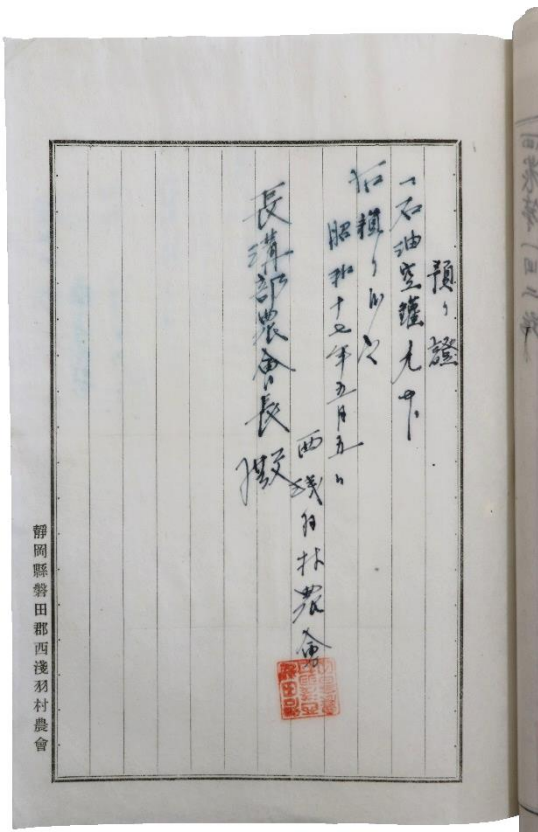
(九四二)
昭和十七年五月五日

西浅羽村農会 (印) (磐田郡／西浅羽村／農会印)／上下顛倒

長溝部農会長殿 (二)

今見つかっている戦時中の石油関係史料はこれだけですが、石油・天然ガスなどの燃料の不足は、化学肥料生産、ひいては農業生産などにも大きく関わってきます。肥料との関係については、本書「肥料」の項を御参照いただきたいのですが、この石油不足は、まちがいなく当時の生活に大きな影響を与えました。

最後に、石油缶の、本来の用途外の使用法をご紹介します。昭和十三



【写真2】「預り証」(本書182号)

3. 空襲下ニ於ケル防火

七月八日午後八時ヲ過ギタル後第一回ノ空襲警報ト同時ニ、各部落内ニ數ト所模倣焼夷彈落下ヲ想定シ家庭防火群ノ訓練ヲ實施ス
比ノ場合藁束スハ麥稈等ニ火シ振鈴又ハ石油罐金ドラニテテ打シ燒夷彈落下ヲ知ラス。此ノ時各家庭一名宛水カ又ハ砂ヲ入レタバケツ等ヲ持テ現場ニ駆出シ消火ニ務ムベシ。落下場所等ハ別ニ防火班ニ指令ス
家庭防火群トハ各家庭一名ノ防空担任者ヲ選ビ一ツノ戸組ヲ以テ一家庭防火群ヲ組織ス
以上

【写真3】防火訓練 (本書53号)

年(一九三八)七月四日付け「西浅羽村防空訓練実施要綱」、アメリカの石油輸出禁止の少し前の、防空訓練の史料です【写真3】。

(前略)

3、空襲下ニ於ケル防火

七月八日午後八時ヲ過ギタル後第一回ノ空襲警報ト同時ニ、各部落内ニ數ヶ所模倣焼夷彈落下ヲ想定シ、家庭防火群ノ訓練ヲ實施ス。

此ノ場合藁束又ハ麥稈等ニ点火シ、振鈴又ハ石油缶、金ドラヒ等ヲ連打シ燒夷彈落下ヲ知ラス。此ノ時各家庭一名宛水カ又ハ砂ヲ入レタバケツ等ヲ持ツテ現場ニ駆出シ消火ニ務ムベシ。落下場所等ハ別ニ防火班ニ指令ス。

(後略) (二)

これは訓練内容ですが、実際の空襲時も同様の対応をしたと考えて良いでしょう(そうでなければ訓練の意味がない)。空襲による火災が起きたら、鈴などの音の鳴るものを鳴らして報せる、とのことですが、金ドラや石油缶を打ち鳴らすよう指示を出しています。

確かに、大きな音を出すなら、金属製品を叩くのが一番ですね。

(1) 「回想録」(丸野勝太郎家文書近世三〇)。横帳、縦 125mm×横 173mm×厚 4mm。本書には収録せず。

(2) 有岡利幸『ものと人間の文化史』84 松茸(まったけ)』(法政大学出版局、一九九七年)二六五―二六六頁など。

(3) 有岡利幸『ものと人間の文化史』84 松茸(まったけ)』(前掲注2参照)ほか多数。戦時中の肥料については、本書「肥料」の項も御参照ください。

(4) 有岡利幸『ものと人間の文化史』84 松茸(まったけ)』(前掲注2参照)二六二―二六四頁。

(5) 入江寿紀「明治期福岡地方石油史(一)：石炭油から石油へ」『エネルギー史研究』石炭を中心として』三、一九七四年。

(6) 入江寿紀「明治期福岡地方石油史(二)：石炭油から石油へ」(前掲注5参照)三六頁。

(7) 入江寿紀「明治期福岡地方石油史(二)：石炭油から石油へ」『エネルギー史研究』石炭を中心として』四、一九七四年)四四頁。

(8) 入江寿紀「明治期福岡地方石油史(二)：石炭油から石油へ」(前掲注7参照)四四頁。

(9) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(岩波書店、二〇一二年)二五三頁。本書は資源を東南アジアに求めた日本の戦時政策を、東南アジア、日本の史料から分析したもので、袋井の史料を読む上でも参考になることが多い。

(10) 日本の軍部では、一九一〇年代後半から石油需要が増えていたという。倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(前掲注9参照)二五四頁。

(11) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(前掲注9参照)二五三頁。

(12) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(前掲注9参照)二五三頁。

(13) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(前掲注9参照)四頁。

(14) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」の人流・物流』(前掲注9参照)二五三頁。

(15) 倉沢愛子『戦争の経験を問う 資源の戦争——「大東亜共栄圏」

の人流・物流』(前掲注9参照)二五三―二七四頁。特に二七〇―二七四頁。日本軍は、運べない原油や天然ガスは捨てたり消却したりしたという。

(16) 昭和十七年(一九四二)五月一日付け「西農第一二三号 石油空缶御提出方依頼ノ件」(『昭和十七年度 昭和十七年前半期参考綴』長溝自治会文書近代一五―二の内)。本書一八〇号。

(17) 昭和十七年(一九四二)五月五日付け「預り証」(『昭和十七年度 昭和十七年前半期参考綴』長溝自治会文書近代一五―二の内)。本書一八二号。

(18) 昭和十三年(一九三八)七月四日付け「西浅羽村防空訓練実施要綱」(『昭和拾参年度 参考書綴』長溝自治会文書近代九の内)。本書五三三号。